

パナソニック教育財団 平成 22 年度先導的実践研究助成

総合的な学習の時間のカリキュラムマネジメントの ワークショップ型研修ガイド



平成 23 年 3 月

ワークショップ型研修ガイド開発プロジェクト

(代表: 村川雅弘)

総合的な学習の時間の充実とカリキュラムマネジメント

村川雅弘（鳴門教育大学）

横断的・総合的な学習や探究的な学習を通して、自ら課題を見付け、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、よりよく問題を解決する資質や能力を育成するとともに、学び方やものの考え方を身に付け、問題の解決や探究活動に主体的、創造的、協同的に取り組む態度を育て、自己の生き方を考えることができるようにする。

これは平成 20 年度の学習指導要領の中で国としての共通に定められた総合的な学習の時間の目標です。各学校においてはこの目標を踏まえながらも地域や子どもの実態に応じて、学校としての目標を設定することが求められています。そして、その目標を実現するための指導計画（全体計画や年間指導計画、単元計画など）の作成に当たって、具体的な目標や育てようとする資質や能力及び態度、学習課題や学習内容、学習活動、指導方法や指導体制、学習評価計画等を定めることになっています。

総合的な学習の時間は教育課程のなかでも最も各学校の自主性や裁量に委ねられているカリキュラムです。学校や教師のカリキュラムづくりの力量が強く求められています。

総合的な学習の時間は、子どもたちに「生きる力」を育成するための貴重な時間です。これを最大限に意義のある時間にするためには、各学校におけるカリキュラムマネジメントが必須です。学習指導要領解説にもその必要性が明記されています。

各学校においては、この時間の指導計画を踏まえ、意図的・計画的な指導に努めるとともに、目標及び内容、育てようとする資質や能力及び態度、具体的な学習活動や指導方法、学校全体の指導体制、評価の在り方、学年間・学校段階間の連携等について、学校として自己点検・自己評価を行うことが大切である。そのことにより、各学校の総合的な学習の時間を不断に検証し、改善を図っていくことにつながる。そして、その結果を次年度の全体計画や年間指導計画、具体的な学習活動に反映させるなど、計画、実施、評価、改善というカリキュラム・マネジメントのサイクルを着実に行うことが重要である。

「学習指導要領解説（総合的な学習の時間）」（小学校・中学校・高等学校）

総合的な学習のカリキュラムづくりは個々の教師の力量や努力では限界があります。子どもの実態からどのような力を育てるのか、豊かな体験を元に探究的な学習を保障するためには地域の素材をどう活用するのか、問題解決において多様な人や情報機器をいかに活用するのか、価値ある学びとするために教科等との関連をいかに図るか、子ども一人一人に育った力をどう把握するのか、実践を通してカリキュラムをいかに改善していくのか、等々。学校全体としての共通理解の下、個々の教師が経験年数や専門性を生かし合い取り組むことが必要です。つまり、教職員一人一人がカリキュラムマネジメントの考え方をもち、実践の開発・実施・評価に協同的に取り組んでいくことが求められています。

その際、教職員が経験年数や専門性を越えて、知識や情報を出し合い、様々な問題解決を展開していく上でワークショップ型の研修が有効です。

このガイドブックは、総合的な学習の教材研究やカリキュラム開発、授業づくりを各学校において教職員が協同的に進めていくためのワークショップ型の校内研修の進め方について、写真や文章によって簡潔にまとめたものです。本ガイドブックによって、その概要をつかんでいただければ幸いです。

各事例に関する研修案や成果物、アンケート結果については、本ガイドブックの最終ページで紹介しているホームページで公開し、ダウンロードができるようにしている。また、他の研修事例についても順次公開していく予定です。

本ガイドブックの目次

- 解説：カリキュラムマネジメントの意義と枠組み 4-5
- 事例：地域の人材・素材を生かした年間指導計画づくり 6-7
- 事例：実態を踏まえた目標設定と単元構想 8-9
- 事例：全員の思いや意見を反映したカリキュラム開発 10-11
- 事例：1時間の授業から単元全体や教科等との関連を見直す 12-13
- 事例：カリキュラムマネジメントを意識したカリキュラム改善 14-15

本ガイドブックで用いる用語解説

概念化シート：縦軸と横軸で仕切られた4つのゾーンからなるワークシート。授業分析では、縦軸を「よかった（プラス）-問題あり（マイナス）」、横軸を「子ども-教師」のシートを用いることが多い。

カリマネ：カリキュラムマネジメントの略称。

KJ法：川喜田二郎氏の開発した情報整理の手法。

指導案拡大シート：本時の指導案を模造紙等の大きさに拡大したもの。授業の展開に添って分析するのに有効。指導案の代りに単元案や年間指導計画などを拡大し、活用することもある。

短冊：少し大きめの付箋。チームの各メンバーの意見等を記述した付箋を整理した見出しのこたばを書き、その上でKJ法を行うことで、複数チームの考えを集約するのに有効。

チーム：ワークショップを行う際の小集団。原則的には4～6人が適正人数。

付箋：着脱可能な糊が付いた紙の薄片。付箋紙とも言う。ポストイットは3M社の商標。

マトリクス： $n \times n$ からなる図。観点を意識して分析するのに有効。

ワークシート：ワークショップを行う際に、各チームが整理・分析のために用いるシート。白紙の模造紙をそのまま使用することもあるが、概念化シートやマトリクスシートなどを使用することで、ワークショップの進め方を制御することができる。



カリキュラムマネジメントの意義と枠組み

田村知子（中村学園大学）

カリキュラムマネジメントは、各学校が教育の主体者として、法令や学習指導要領を踏まえ、児童生徒や学校の実態に即して、カリキュラムをつくり、動かし、変えていく営みです。その全体像をつかむために、下図に示すモデルを使って説明しましょう。

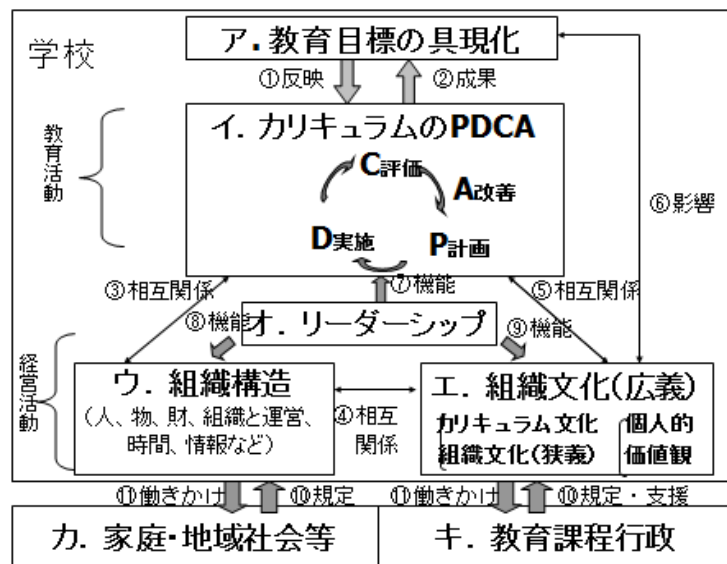
まず、図の上方の「ア. 教育目標の具現化」は、学習指導要領が示す目標を踏まえて、学校としての目標を設定することから始まります。目標は、「育てようとする資質や能力及び態度」として明確にし、学校全体で共有化します。「子どもにつけたい力」や「めざす子どもの姿」として具体的に設定するのがポイントです。また、それに先立ち、自校の児童生徒について、実態を多面的に分析して、課題を明らかにします。学校の教育目標との関連も明確化します。

次に、目標をよりよく達成するために、効果的な「イ. カリキュラムのPDCAサイクル」をつくります。このとき、ゼロから計画をつくるよりも、まずは現在のカリキュラムの有効性についての評価から始め、それを改善して計画につなげる方が適切です。

P（計画）段階は、全体計画と年間指導計画の作成までを指します。単元づくりと授業は実践D（実施）段階にあたります。

次にC（評価）段階です。カリキュラム評価は、改善に確実につなげる必要がありますが、PDCAサイクルのうち、最も難しいのがC・A段階だといわれています。C段階を機能させるためには、P段階において、評価基準の設定、評価方法や評価時期を計画しておきます。これは、指導と評価を一体化するためにも欠かせません。評価基準は、「ア. 目標」との関連で作成します。もうひとつのポイントは、評価する際は、たとえ簡易なものであっても、改善案も同時につくることです。年間スパンのPDCAサイクルとは別に、単元毎の短期スパンのpdcaサイクルを意識してこまめに評価・改善を行っていけば、次の年間指導計画作成にも即座に生かします。1時間の授業毎にも、必要があれば行いたいものです。

以上、教育活動面を直接対象とするマネジメントにおいては、目標とカリキュラムの間、総合的な学習の時間と各教科・領域との間、各学年間や小学校・中学校・高等学校間のカリキュラムなどに「つながり（連関性）」をつくることが重要です。



次に、「ウ. 組織構造」とは、人（人員配置、人材育成など）、物（施設・設備、教材・教具、情報、時間など）、予算、組織体制、校内研修といった、組織の「目に見える」部分のマネジメントです。たとえば授業時数の弾力的な運用や生徒の学習組織編成及び学習環境の整備は、総合的な学習の時間の目標を達成するために十分検討する必要があります。また、検討のための教師の時間の確保や研修組織づくりも必要です。

さらに、「エ. 組織文化」も重要な要素です。組織文化とは、校内の大方の教職員がもつ見方・考え方、行動様式のことです。これは、2つに分けられますが、一つ目は、学力観や指導観に関わる「カリキュラム文化」です。そもそも総合的な学習の時間に対しては、教員間に温度差があり、ネガティブな見方をする教師が多い学校もあります。総合的な学習の時間の効果（例えば、児童生徒の成長や変容、地域社会との連携協力の強化など）を示すデータを提示するなどして、ポジティブな見方へと変えていきたいものです。もう一つは、働き方や人間関係に関わる「狭義の組織文化」です。教員相互が常に授業や教室をオープンにして学びあう協働的な組織文化の学校もあれば、教科間や学年間に「見えない壁」がある学校もあります。ネガティブな組織文化は、総合的な学習の時間の推進を阻害します。まず、学習指導要領の理念を共通理解する場や、児童生徒の実態・課題を共有化する場、教科を越えて授業づくりをする場を設けるなどして、教科や学年を越えて創造的に協働できる組織をつくりたいものです。教職員一人ひとりの参画を促進するワークショップ型研修は、ポジティブな組織文化づくりに有効に機能します。

そして、「カ. 家庭・地域社会等」「キ. 教育課程行政」といった学校外の要素にも、「このような力を育てたいから」「この教育活動を行うために」という視点で働きかけ、パートナーの関係を築きます。学習活動を通して生徒が地域に貢献する方向性も大切です。学校内外の組織を対象とするマネジメントでは、人と人の「つながり（協働性）」をつくるのが重要です。

最後に、校長や教務主任、総合的な学習の時間コーディネーター等の「オ. リーダーシップ」は重要です。教師、中でもリーダーは、これまで述べた要素一つひとつを見る「蟻の目」と同時に、全体を俯瞰する「鳥の目」をもつことが求められます。このモデルと下記の学習指導要領解説書の目次を見比べてみてください。解説書の目次には、これまで述べた各要素が明確に示されています。総合的な学習の時間の活性化は、カリキュラムマネジメントが支えるのです。

文部科学省『学習指導要領解説 総合的な学習の時間編（小学校・中学校）』の目次

● 第1章	総説	
● 第2章	総合的な学習の時間の目標	【ア.教育目標の具現化】
● 第3章	各学校において定める目標及び内容	【ア.教育目標の具現化】
● 第4章	指導計画の作成と内容の取扱い	【イ.カリキュラムのP】
● 第5章	総合的な学習の時間の指導計画の作成	【イ.カリキュラムのP】
● 第6章	総合的な学習の時間の年間指導計画及び単元計画の作成	【イ.カリキュラムのP・D】
● 第7章	総合的な学習の時間の評価	【イ.カリキュラムのC・A】
● 第8章	総合的な学習の時間の学習指導	【イ.カリキュラムのD】
● 第9章	総合的な学習の時間を推進するための体制づくり	【ウ.組織構造, オ.リーダーシップ, カ.家庭地域等】

高等学校は10章からなり、第5章「高等学校における総合的な学習の時間の意義」は【エ.組織文化】のカリキュラム文化に関わるものである。

地域の人材・素材を生かした年間指導計画づくり

総合的な学習では地域のひと・こと・ものを活かした内容や活動を設定することが大切です。地域の人材や素材を調査し、それを整理しておくことが重要です。「イ．カリキュラムのCA」と「カ．家庭・地域との関連等」に該当します。

指導計画見直しワークショップ

多様なネットワークを活用して様々な視点から地域素材を調査します。

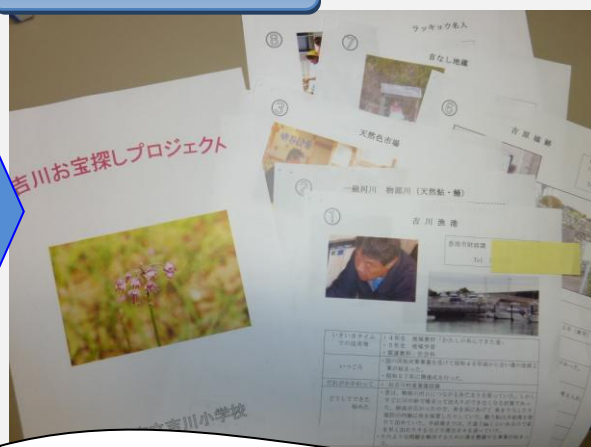


素材発掘フィールドワーク



教職員が放課後等に手分けして、地域のひと・こと・ものを取材する。

地域情報の整理



収集した情報を写真や文章で「お宝(地域人材・素材)シート」にまとめる。

情報の所在地の明示

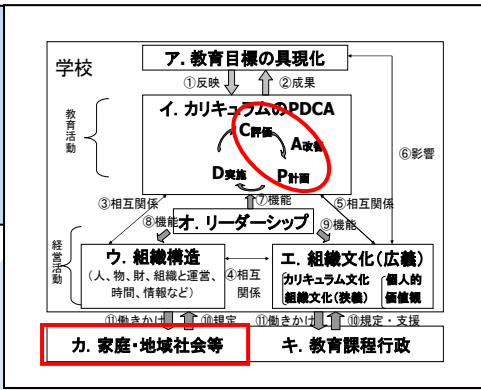


「お宝」の所在地を校区の地図上に明示する。

年間指導計画の見直し

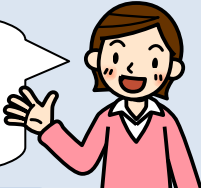


「お宝」を参考にして、地域との関連を中心に年間指導計画の見直しを図る。



高知県香南市立吉川小学校

地域のひと・こと・ものを活かした内容や活動を具体的に想定しましょう。



改善のポイントの構造化



拡大した年間指導計画に付箋を貼ったり、改善のポイントを直接書き込む。

他学年チームへの解説



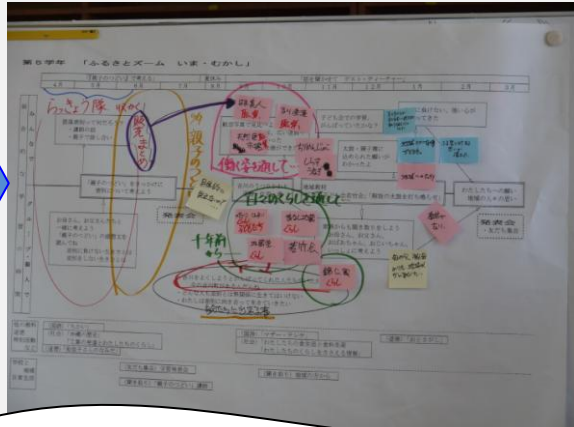
作業途中に他学年チームの解説を聞きに行き、それを参考に学年間のつながりを考えた計画を作る。

成果の共有化



各学年の成果物の発表を行い、アイデアを付加すると共に共有化を図る。

成果物



会議室等に成果物を掲示しておき、次年度の年間指導計画づくりに生かす。

このワークショップでは、今年度の実践を元に、地域のひと・こと・ものとの関連の視点から見直しを図るものです。新年度に、成果物を踏まえて具体的な年間指導計画を作ることが大切です。

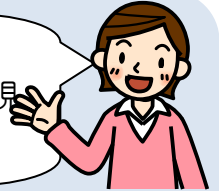


実態を踏まえた目標設定と単元構想

子どもにどんな力をつけたいかを全職員で考え共有することは、カリキュラムマネジメントの「ア. 教育目標の具現化」に該当します。

目標設定ワークショップ

全職員で目標を設定します。カリキュラムマネジメントの視点での構造化がポイントです。



KJ法による考えの集約



学年や教職経験を混成させたチーム編成で、「今年度、学校全体で重点的に取り組みたいこと」を多面的に出し合う。

短冊方式による考えの吸い上げ



付箋を各チームで整理し、見出しのことは大きめの付箋（短冊）に記載する。

成果物

発表による共有化と構造化



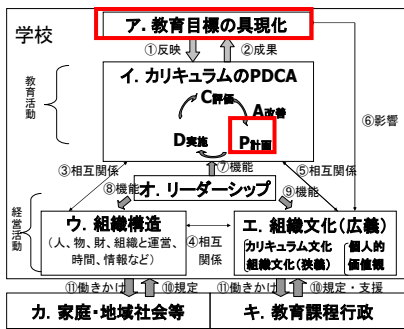
チームごとに短冊を読み上げ、全体で共有しながら、黒板上でKJ法を行い整理する。



3つの視点で構造化する。

総合的な学習の時間は教育課程全体との関連が重要です。取り組みたいことを「目標」「教育活動」「経営活動」の3つの視点で整理することで、カリキュラムマネジメントの概要をつかむことができます。



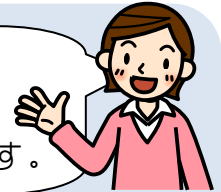


佐賀県唐津市立小川小中学校

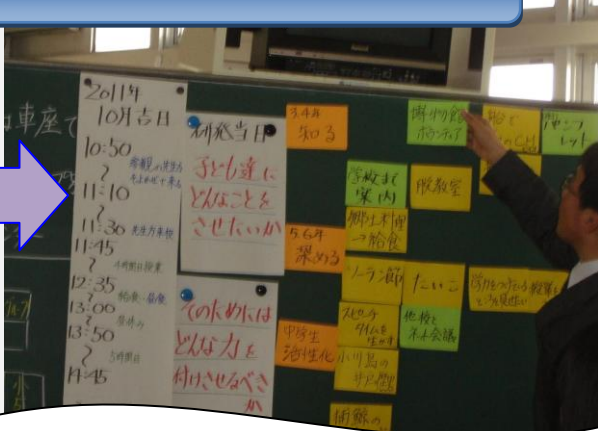
年間指導計画の作成に先立ち単元を構想することは、カリキュラムマネジメントのPの前段に該当します。

単元構想ワークショップ

設定した目標に即した単元内容を構想します。ゴールイメージが重要です。



ブレインストーミング法



ウェビングによる整理



研究発表会等におけるめざす子どもの姿を具体的に発表し共有化を図る。

めざす子どもの姿を核にして、学年別にそれを具現化する活動や内容をつなげる。

発表と共有化



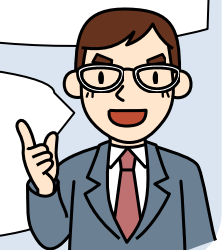
各チームが単元構想の概要を発表し、助言しあうとともに、全体での共有化を図る。

成果物



成果物は会議室等に掲示しておき、新たなアイデアや情報を随時付け加える。

単元構想は計画の前段なので、更に単元展開を具体的に考えて年間指導計画を作成します。成果物のアイデアを生かし地域素材の収集やネットワークづくりなどの整備を行うことができます。



全員の思いや意見を反映したカリキュラム開発

子どもたちの学習活動をより総合的、探究的、協同的な学習にするためには、総合的な学習の時間の趣旨を踏まえて、単元づくりを行うことが大切です。カリキュラムマネジメントの「イ、カリキュラムのPDCA」に該当します。

単元づくりワークショップ

複数学級あれば学年ごとに、単学級場合は学年部ごと、または学校全体で行いましょう。



個々の意見を集約



各自、子どもに身につけさせたい力や教科等との関連などを付箋に書き出す。

付箋の色についての説明

付箋の色と内容の関係

その単元でつけたい力（実態や目標を意識）

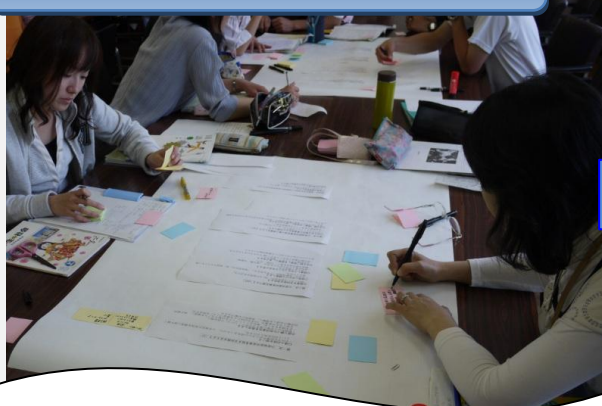
教科等との関連（内容と能力の関連を意識）

校内体制・環境整備（人的面と物的面を意識）

家庭や地域、行政等との関連（双方の価値を意識）

思いや意見を記述する付箋の色を共通にし、使い方について説明を行う。

詳細を省いた年間指導計画

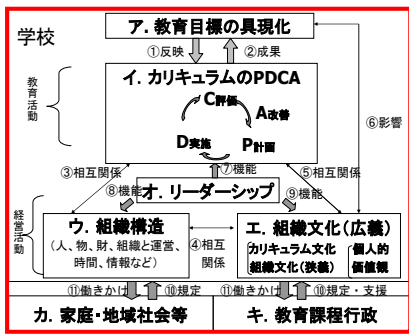


教職員一人一人の思いや意見を反映させるために、活動や内容の詳細な情報を省いた年間指導計画を準備する。

学年別チームによる作成



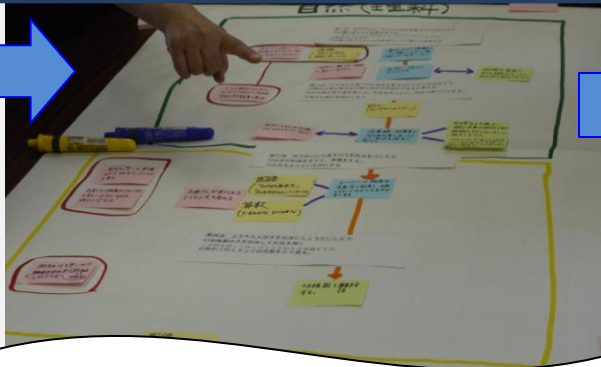
当該学年の教師及び関連する教職員が同じチームになり協同的に作成する。



単元構想を計画する段階で「カ. 家庭・地域社会等」との関連を意識します。

一人一人の思いや願いを引出し認め合う雰囲気づくりが大切です。

アイディアの関連付け・構造化



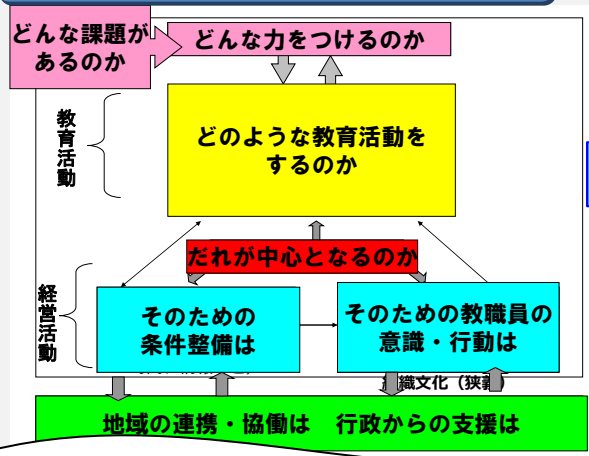
異なる色の付箋グループ間の、関連づけや構造化を図る。

発表による共有化と助言



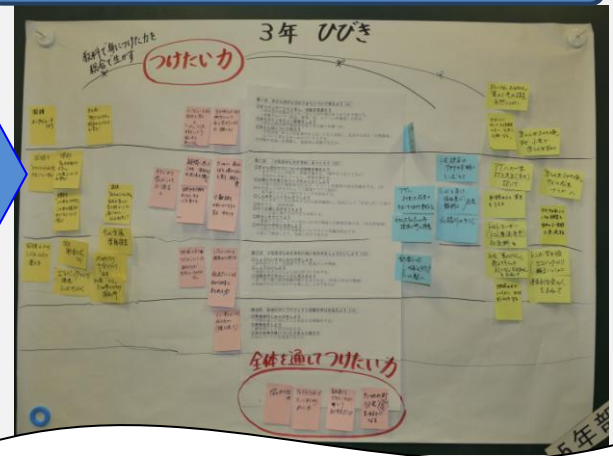
学年ごとに3～5分程度の時間を使って発表する。助言や協議を行いつつ学校全体で共有化を図る。

カリマネの視点からの解説



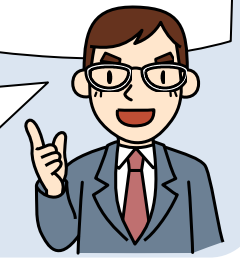
付箋の色とカリキュラムマネジメント・モデルとの関連を説明する。

成果物を活かした単元づくり



成果物に貼られた思いや意見、情報を活かして、年間指導計画づくりを行う。

研修の最後に、付箋の色とカリキュラムマネジメント・モデルとの関連を解説することにより、総合的な学習の単元の作成、実施においてカリキュラムマネジメントの考え方が重要であることが理解され、意識されていきます。

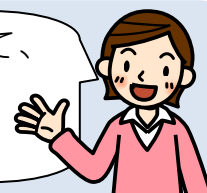


1時間の授業から単元全体を見直す

子どもや地域の実態を踏まえて計画・実施する総合的な学習では、実践を通してカリキュラムの評価・改善を行うことが重要です。カリキュラムマネジメントの「イ、カリキュラムのPDCA」のDにおけるcapに該当します。

授業研究ワークショップ

1時間の授業研究を通して、単元全体や他教科等との関連を見直します。



授業者による説明



研究授業の後、子どもの実態や本時のねらい、工夫した点について授業者が説明をする。この時は、反省の弁は述べない。

付箋の整理



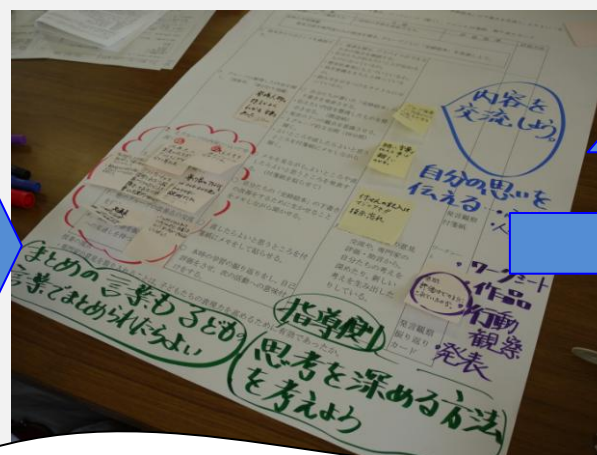
各自が授業を参観した際に記入した付箋を持ち寄り、ワークシート上で整理を行う。

多様なワークシートの活用

①「指導案拡大シート」による分析

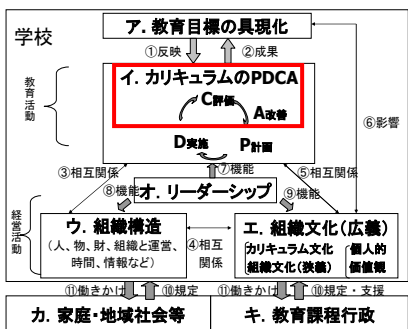
6つのチームで異なるワークショップ

- ①「指導案拡大シート」による本時の分析
- ②「概念化シート」による本時の分析
- ③「マトリクスシート」による本時の分析(2チーム)
- ④「単元案拡大シート」による教科等との関連の分析
- ⑤「単元案拡大シート」による単元の分析



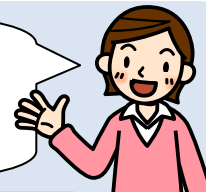
単元や他教科等との関連を同時に分析するために、単元案や年間指導計画を拡大したシートを用意する。

授業展開に添って、子どもや教師の様子を元に分析・整理を行う。

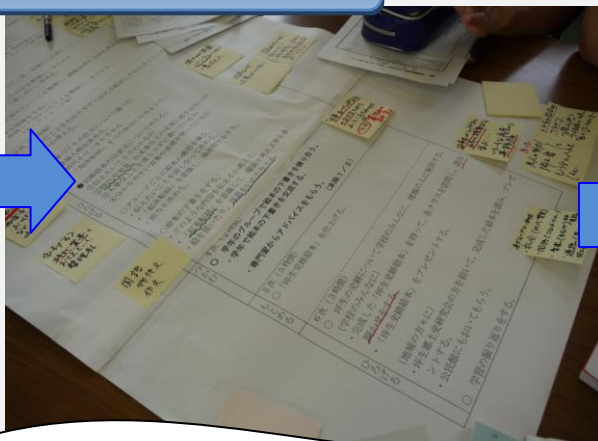


広島県福山市立坪生小学校

チームごとに異なるワークシートを用いることで、授業を元に成果や課題を多面的に分析できます。



② 単元案の見直し



本時の取り組み状況を元に、単元全体の改善点や修正点を明らかにする。

③ 教科等の関連の見直し



教科書を持ち寄って、本単元での教科等との関連を改めて具体的に見直す。

④ 「マトリクス」による分析



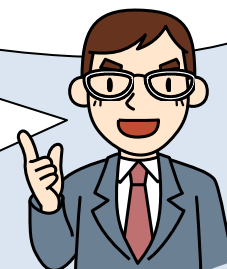
学校で重視している授業づくりの視点を中心に分析・整理を図る。

発表による共有化



分析手法の違いから見てくることの関連についての共有化を図る。

1時間の授業分析を通して、単元計画や他教科等との関連を同時に見直すことで、単元全体や教科等関連の見直しを同時に行えるだけでなく、相互の関連がより明確になります。教師にカリキュラムを関連的に捉える視点や意識が育ちます。



カリキュラムマネジメントを意識したカリキュラム改善

実践を踏まえて、カリキュラムの評価と改善策について検討することは、「イ・カリキュラムのPDCA」の中の「C評価」と「A改善」に該当します。

カリキュラム評価 ワークショップ

複数の単元を異なる2つの方法で分析することができます。



研修のねらいと方法の確認



ワークショップのねらいと方法について説明し、共通理解を図る。

チーム編成と分析方法の決定

方法 \ 単元名	生活と社会	台湾現地学習
カリマネモデルによるワークショップ	Aチーム	Cチーム
年間計画シートを使ったワークショップ	Bチーム	Dチーム

多面的に検討するため、複数単元に関して、異なる方法でワークショップをします。学年、教科、経験年数を混在したチーム編成にすることにより多様な意見がでる。

付箋への改善点の記述

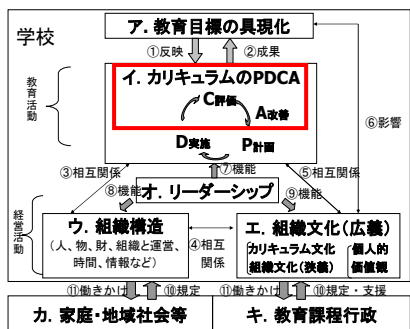


各自が実践を踏まえて、改善のポイントを付箋に記入する。

カリマネモデルによる分析



「カリキュラムマネジメント・モデル」のどこに該当するかを確認し合いながら付箋を貼る。



石川県金沢大学附属高等学校

「カリキュラムマネジメント・モデル」のワークシートを使うことで組織体制や学校外にも自然と目をむけることができます。



年間指導計画による分析



拡大した年間指導計画を模造紙の中央に貼り、活動内容や時期などを考慮しながら分析する。

発表に向けての確認



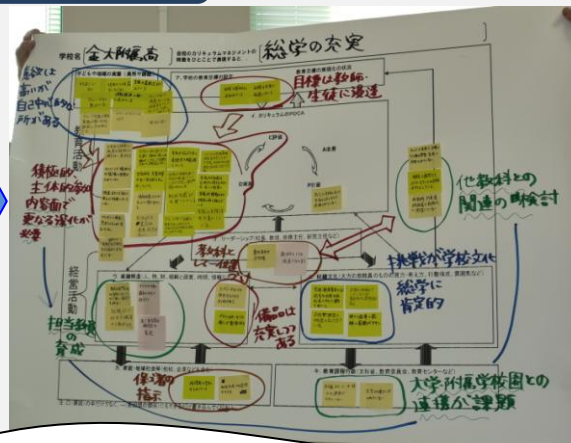
チームごとに分析結果についての確認を図りつつ、加筆・修正を行う。

発表と共有化



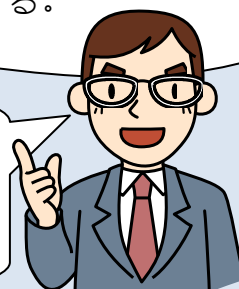
成果物の説明と質疑応答により、さらなる改善と共通理解を図る。

成果物



成果物を会議室等に掲示しておき、カリキュラムづくりに活用する。

ワークショップによるカリキュラム改善は全教職員の実践を踏まえての意見や考えが反映されます。研修の最後には、改善ポイントについての確認を行いましょう。また、次年度のカリキュラムを作成する際に成果物を活用することが大切です。



◆ 関連資料のホームページアドレス

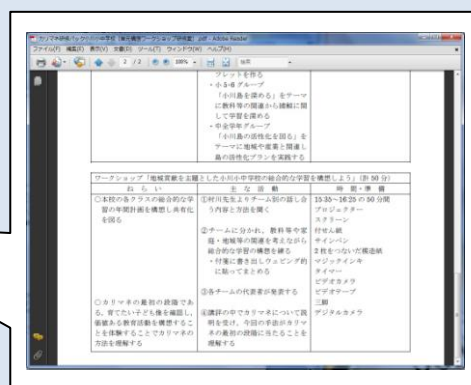
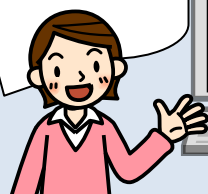
本ガイドブック並びに掲載事例及び追加事例に関する資料(研修案やワークシート、アンケート結果など)は以下のホームページで見ることができます。

鳴門教育大学・村川研究室(Murakawa-lab) <http://www.sougou.net/>



各事例についてもっと詳しく知りたいときは、村川研究室(Murakawa-lab)にアクセスしてください。

資料が PDF ファイル形式でアップロードされています。そちらをクリックしてください。



◆ 本ガイドブックに関連する参考文献一覧

川喜田二郎著『発想法 創造性開発のために』中公新書、1966年

村川雅弘編著『ワークショップ型研修のすすめ』ぎょうせい、2005年

村川雅弘編著『ワークショップ型研修の手引き』ジャストシステム、2006年

村川雅弘編著『「ワークショップ型校内研修」で学校が変わる 学校を変える』教育開発研究所、2010年

中留武昭・田村知子著『カリキュラムマネジメントが学校を変える』学事出版、2004年

田村知子・中留武昭著「カリキュラムマネジメントを深め、広げるストラテジー」『教職研修』(教育開発研究所) 連載、2010年6月～現在

本ガイドブックは、パナソニック教育財団の平成22年度の先導的実践研究助成「総合的な学習のカリキュラムマネジメントのためのワークショップ型研修パックの開発」(研究代表者:村川雅弘)によって作成されたものです。

研究及び作成にあたり、以下の学校・教員・研究者がかかりました。

研究協力校: 高知県香南市立吉川小学校、佐賀県唐津市立小川小中学校、兵庫県たつの市立小宅小学校、広島県福山市立坪生小学校、金沢大学附属高等学校

研究協力者及び作成協力者: 田村知子(中村学園大学)、筒井泰登(唐津市立小川中学校)、森本英己(鳴門市立桑島小学校)、國澤和美(香南市立吉川小学校)、石堂裕(たつの市立小宅小学校)、山本吉次(金沢大学附属高等学校)、村川雅弘(鳴門教育大学)